

ことばだより

Vol.7

2022（令和4）年6月

連載

学習評価の鍵は“指導との一体化”

第1回：指導と評価の一体化とは

大妻女子大学 教授
かばやまとしろう
樺山敏郎

○連載＜3回シリーズ＞のコンセプト○

本連載では、学習指導要領に基づく学習評価の方向を示します。鍵は、“指導との一体化”です。曖昧な国語科と揶揄されないように指導事項を明確にしたうえで信頼に足る客観的な評価の成立を目ざしたいものです。3回シリーズの第1回は「指導と評価の一体化とは」、第2回は「『読むこと』の学習評価」、第3回は「『話すこと・聞くこと』『書くこと』の学習評価」をテーマとします。

教師が指導したことを評価していますか？

各単元において身につける資質・能力を明確にすることは当然ですが、その教えたことを精査し子どもたち一人一人に確実に指導しているでしょうか。次は、〔知識及び技能〕の語彙に関わる第1学年及び第2学年の指導事項です。

身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること

文節に注目すると、「～量を増し」「～使うとともに」「気付き」「豊かにすること」の要素に分けることができます。これら全ての要素を確実に指導できていればいいのですが、やや心もとない状況も散見されます。国語科の指導事項は複数回取り上げて指導することが原則です。螺旋的・反復的に指導することで徐々に資質・能力を高めます。指導と評価は常に一体化が重要です。そのためには、指導事項の精選、というより“厳選”の意識が重要です。国語科の指導事項の一文にはさまざまな要素が網羅的に表現されていますので、その内容を分析的に捉えることが重要です。先述の語彙を例にすると、該当

単元でどの要素を重点化して指導するのかを明確にすることです。全てを取り上げないのであれば、その要素は削除すればよいのです。取り上げない内容は、年間の見通しの中で計画的に指導する必要があります。教師は指導したことを評価することが原則です。

子ども自身の学習改善につながっていますか？

教師は優位な立場に立つ評価者です。単元ごとにテストを行い、点数をつけて渡し、学期末には通知表で◎、○、△の記号等で知らせます。評価者である教師の役割はそれだけでしょうか。評価を一人一人の子どもにわかりやすく伝えてありますか。子どもたちが納得できる理由や根拠の用意はあるでしょうか。評価は子ども自身の学習改善につながることで重要です。今日の課題が、今日の宿題で解決されればなによりです。そうでなければ、明日の学習で意識して取り組むことが主体的な学びの実現につながります。評価とは本来子どもの成長のために行うものです。

教師の次なる指導改善につながっていますか？

テストをはじめ全国学力調査もそうですが、正答率が低調な問題があります。授業では教師の問いかけに子どもたちの反応が返ってこない場合もあります。それらは子どもの側になんらかの問題があるでしょう。しかし、指導しても読めない、書けない、話し合いが深まらないという課題はつきものです。それは教師に突きつけられる子ども側からの評価と受け止めたいためです。子どもが発する困り感に寄り添いつつ、指導改善につなぐ教師であり続けましょう。

次号（7月発行予定）

連載第2回「『読むこと』の学習評価」に続く。



1. 「見方・考え方」がはたらく 発問のポイント

発問によって「見方・考え方」がはたらくか否かは、子どもが「問い」をもつかどうかによる。教師の発問により、新たな視点が入り入れられることによって、子どもたちは学びを深めるようになる。つまり、教師の発問が一つの刺激として作用する。子どもはいったん、立ち止まり、「はっきりさせたい」「本当はどうなんだろう」と自ら学びを求めるようになる。この瞬間を「子どもの問いになった瞬間」と私は呼び、その瞬間を創り出すことが授業における教師の役割と考えている。

国語科は「言葉の実践知」を育てる教科である。さまざまな状況や文脈の中で、言語活動に確かな知識及び技能を位置づけて、自覚化を促していく。そのことによって、どのように言語を運用していくか、実践知を高める教科だといえる。

では、子どもが言葉の学びに主体的に関わり、実践知を豊かにしていく発問はどうあればよいのか。本稿では、物語を取り上げて、発問のあり方を検討する。

2. 物語『のらねこ』（三上）における 発問のポイント

(1) 学習材について

学習材『のらねこ』は、のらねこをかわいがりたい男の子リョウと、人にかわいがられたことのないのらねこの関わりが主たる題材になっている。その中で、リョウとのらねこは互いに「前足をのばし合い」、ようやくリョウは「前足で前足の先をなでてあげ」ることができるようになる。しかし、突然の「リョウの家のねこ」の登場で、のらねこはリョウの前から姿を消してしまう。「よこんで」帰っていくリョウの姿を、屋根の上からのらねこが見ている場面で物語は終わる。教材で着目したい点は、以下のとおりである。

- ・リョウとのらねこの人物像、関わり
- ・物語の転換点となる「あ。」
- ・余韻を残す結末

ここで実際に1時間の授業プランを取り上げ、「見方・考え方」がはたらく○発問とあまりはたらかない×発問を示すとともに、1時間の発問構成を紹介する。

(2) 授業プラン

授業のねらいは次のとおりである。

リョウとのらねこの関わりを話題に話し合うを通して、物語の転換点となる会話文に着目し、結末場面ののらねこの心情を吹き出しにまとめることができる。

○発問「じっとしているのらねこは、もう怖くなくなったのかな？」

×発問「のらねこは、このとき、どんな気持ちだったのでしょうか？」

×発問で直接、気持ちを問うことによって、子どもたちはのらねこの心情に思いをめぐらせることができるだろう。しかし、そこで表現されるのは、「～な気持ち」とイメージや感覚のみになってしまう。

○発問の「もう～ではなくなったのか」という部分によって、場面の比較を促しつつ、のらねこの心情に思いをめぐらせることができる。授業の実際では、子どもたちから「本当は怖かったかもしれないけれど、初めてかわいがられるというのが、気持ちよかったんだと思う」「安心して、のらねこはもう怖くなかったのかもしれない」という発言がみられた。

本授業の発問構成を学習活動とともに、以下に示す。
(○印は発問)

①本時の課題を捉える。

○物語を読んで気になったところはどこですか？

【学習課題】屋根の上からリョウの姿を見ているのらねこの気持ちを吹き出しで表そう。

・読後感の交流から、本時では最後の場面の吹き出しをつくるという課題意識をもたせる。

②リョウとのらねこの関わりについて話し合う。

○じっとしているのらねこは、もう怖くなくなったのかな？

・互いに前足を伸ばし合い、リョウが前足でのらねこの前足の先をなでてあげる場面に焦点化する。

③物語の転換点となる会話文を意味づける。

○突然声を出した「あ。」には、のらねこのどんな気持ちが表れている？

・行動描写「じっとしています」には描かれていない、のらねこの心情について考えさせる。

④のらねことリョウとの出会いを意味づける。

○のらねこは、なぜリョウのところに来たのだろう？

・なぜリョウのところに来たのかを考えることで、のらねこにとって、リョウとの出会いがどんな体験であったかを意味づける。

授業の終末では、物語の結末場面を取り上げ、のらねこの心情を吹き出しで表すようにした。子どもたちは吹き出しに次のように表していた。

・「かわいがられるってことがわかったよ。」

・「やっぱり俺はのらねこなんだ。」

3. 「子どもの思考が動き出す発問」とは

発問は、教える側と学ぶ側の筋を一致させる授業展開の要である。また、学習者の思考を促し、授業の中心的役割を担う授業技術である。しかし、国語科における発問は、内容確認の発問、想像の語りに終始する発問、教師の解釈をたどらせる発問などが多く、教師の教える筋が重視され、子どもの学ぶ筋は軽視されてきたといわざ

るをえない。このことは、学ぶ側である子ども主体の授業展開を立ち止まらせている一要因ともいえるだろう。そこで、教師の側からだけでなく、子どもの側の学びから国語科授業を問い直す。そのうえで、これからの国語科授業が本当に見ていかなければならないものこそ、「子どもの学び」であると捉えている。具体的な授業づくりにおいて、大切にしているのが、次に示す四つの発問構成である。

【きっかけ発問】は、必要な内容や情報を確認したり、取り出したりすることを意図した発問である。また課題として投げかけることで、本時の学習の方向性を示す発問でもある。

【誘発発問】は、子どもたちの見方や考え方のずれから問いを引き出す発問である。言葉の関係性について、子どもたちの見方や考え方がずれたとき、問題化される。そのことによって、ことばに対する多面的な見方・考え方が引き出されるようにすることをねらっている。

そして、何がどう問題だったのかが見えてきたところでの発問が【焦点化発問】である。論理構成に着目したり、新たな視点を取り入れたりすることで、学びがよりいっそう深くなることを意図した発問である。教師の発問がきっかけとなって、学びを促進することをねらっている。

【再構成（再考性）発問】は、最後に何が言えるのか、次に生かしたい学びは何かなど、学びの過程を振り返ることで自覚化し、定着することをねらった発問である。

▼ 四つの発問構成の一覧

過程	教師の側から見た発問の役割	子どもの思考の文脈
導入	【きっかけ発問】 課題として投げかけることで、学習の方向性を示す	【考えたくなる】 おもしろそうだな、やってみたいと考え、学びたくなる
展開	【誘発発問】 言葉の問題について、子どもたちの見方や考え方にずれが生じる	【動き出す】 ずれが見つかって、本当はどうなんだろうと、動き出すようになる
	【焦点化発問】 新たな視点を取り入れることによって、学びを深める	【立ち止まる】 はっきりさせたい、どうしたらいいんだろうと自ら学びを求めるようになる
終末	【再構成（再考性）発問】 学びを振り返り、自覚化する	【意味づける】 振り返って、大切なことを意味づける

教室で楽しむ ことば遊び

今号から4号にわたり、「ことば遊び」を活用した言葉の学習の実践を紹介します。

第一回 教室でしりとり遊びを楽しむ

むかいよしひと
向井吉人（元東京都小学校教員）

教育出版の1年上巻に『ことばを あつめよう』という学習があります。教室の中の「ことばさがし」をする教材で、「まど」「ほん」「いす」が、平仮名学習の例として掲載されています。この活動は、教室を見渡しながら、知っているもの・ことばを見つけるというものです。

まず、この教材をもとに、「教室の中にあることばを探してみよう」と呼びかけて、授業を始めました。教科書の三つの例は、いうまでもなく早々に発表されました。

1. 〈しりとり〉で食べ物ことばを探してみよう

次に、食べ物のことばを〈しりとり〉の要領で探す活動を行いました。給食の献立にあった「はるまき」からスタート。「きのこ」「きむち」「きなこ」などが発表されましたが、「きなこ」を板書して、次は「こ」の食べ物を探します。

「こめ」「こんべいとう」「こしひかり」などが出ました。「こんべいとう」を書いて、「こんべいとう食べたことある？」と聞くと、半数ほどの子の手が上がります。

「う」につなげると、「うどん」「うなぎ」「うし」と出て、「ええっ」という雰囲気に。「牛肉食べるよ」という発言があって、「そうだねえ」と一件落着。

この中から「うどん」を書きましたが、「ん」で終わるのはルール違反。しかし、今後の〈しりとり〉遊びのバリエーションを広げるため、「どん」と2文字でつなげることにしました。

そして、「どんぶり」が出されましたので、ここでおしまいにして、板書を声に出して読みます。

はるまき→きなこ→こんべいとう
→うどん→どんぶり

速さを変えたり、「こんべいとう」をはさんで二つに分けたりなどしながら読みました。

2. お絵かき〈しりとり〉

「しりとりしながら絵を描いてみよう」と、B6版の画用紙を配ります。早々と「できた!」と見せにくる子の多くは、三つのことばを書いていたので、「五つくらいにしてよ」と促すなど、1対1でのやりとりをします。これも楽しい時間ですね。

色塗りもして提出してもらいます。五つ以上のことばをつなげて、絵もしっかり描けている作品をお手本として紹介しましょう。



次号（7月発行予定）に続く。

次号では五十音表を生かした実践を紹介予定。

本誌の デザイン

『小学国語通信 ことばだより』では、デザインに季節ごとの「かさねの色目」（平安時代以降の服飾文化に用いられた色彩）をイメージした配色を用いています。今回の号では、夏のかさねの色目の中から、茎の下から順次上に向かって花開く立葵を表した「葵」を選びました。ぜひ次号のデザインもご覧くださいますと幸いに存じます。

※「かさねの色目」の組み合わせには、諸説あります。

小学国語通信 ことばだより Vol.7 2022（令和4）年6月発行

教育出版株式会社 編集局 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館

TEL：03-5579-6278（代表）